

# 史林

## 第四卷 第壹號

大正八年一月一日發行

(通卷第十三號)

### 厥 究

## カンフウ問題殊にその陷落年代に就いて

文學博士 桑原 隲藏

唐の中世以後大食人即ちムハメツト教徒は、盛に南支那の諸港へ通商した。中にもカンフウ (Canton) の港は、大食人の通商によつて尤も繁昌を極めた。唐末にバンシヤア Banchoua — 唐末の大賊黄巢 Huang Chao の名を訛つた——といふ謀反人が、支那の諸市を攻め降して、カンフウに押しも繁昌を誇つたカンフウの外國貿易も爾後衰退

したと、西曆十世紀の初半のアブ・ヂェイド Abou Zeyd は傳へて居る。(1)

さてこのカンフウの港を支那の那邊ナヘンに擬定すべきかは古來異説があつて、今日でも依然東洋史上の一問題たるを失はぬ。今より約二百年前に、始めてこの問題に手を觸れたルノード Renaudot は之を廣州に當てたが、(2) その約百年後に出たクラブロート Klapproth は、之に反してカンフウを杭州に當てた。(3) この二説のうち、西洋では從來カンフウ杭州説が有勢で、レイノー Reinand シュペンゲル Sprenger ユール Yule リヒトホーフエン Richthofen ドゥフリー De Goeje 等の如き歴々の大家は、皆クラブロートのそれに賛同して居る現時ではヒルト Hirth ベリオ Pelliot などは、カンフウ廣州説に左袒して居るけれど、ユルヂエー Couartier の如きは、依然カンフウ杭州説を固守して之に屈服せぬ。(4)

二

カンフウ杭州説の根據は要するに、左の三點に在ると思ふ。

(一) 元時代のマルコ・ポーロ Marco Polo に据ると杭州 (Quinsai) に近くガムブウ Gampon といふ港があつて、こゝに海外の商船輻輳したといふ。このガムブウは錢塘江口の激浦 Kan-pouhou の音譯である。この場合に於ける k の發音は殆ど g に類する。故に、ガムブウの名稱は激浦の音譯として頗る實際に近い。アラブ (大食) 人は p の字を有せず、すべて f の字を以て p の音に代へるを常とするが故に、Kan-pou が訛つて Khanfou となつたのである。唐代のカンフウは畢竟激浦であつて、更にこの激浦を附屬港として居る杭州を指さねばならぬ。(5)

(二) 西曆十四世紀の初めのアブッル・フェダー Aboul Fedâ の地理書に、カンサー Khanstā 一名カン

クウ Kiangou と明記してある。カンクウは勿論カンフウの誤と見なければならぬ。カンサーとは南宋蒙古時代を通じて杭州に與へられた名稱である。アブールフェダーに據れば、必然的にカンフウも亦杭州と認めねばならぬ。<sup>(6)</sup>

(三)支那の歴史に據ると、黄巢の賊衆が杭州を陥れたのが僖宗の乾符五年、回曆二六四西曆八七八で、廣州を陥れたのが、その翌乾符六年、回曆二六五西曆八七九である。然るに一方アブエイドは、カンフウの陥落を回曆二百六十四年と言明せる以上、カンフウは是非とも杭州でなければならぬ。クラプロートは實に左の如く述べて居る。

アブエイドは黄巢のカンフウ攻撃を回曆二百六十四年に繋げた。この年は「西曆に換算すると」八百七十七年の九月十二日に窺まり、八百七十八年の九月一日に終る。支那の

記録に據ると、杭州府の陥落、従つて「杭州に近き」澉浦 Kan-tou の陥落は正に八百七十八年に當つて居る。<sup>(7)</sup>

### 三

上述のカンフウ杭州説の三根據の中で、第一第二の論據は薄弱で、殆ど反駁を加へる程の價値がない。

(一)マルコポーロのガムブウ又はガンブウ Ganpu は澉浦(浙江)で、アブエイドのカンフウ Kanton は廣府(廣東)——廣州は都督府の所在地で、又帥(節度使)府の所在地であるから、唐宋時代にかけて廣府とも呼ばれた——である。この兩者は全然區別せなければならぬ。廣府(廣州)は唐代は勿論、遙かその以前から海外貿易港として開かれて居つたが、澉浦(杭州)は宋時代に開港されたもので、<sup>(8)</sup>唐代からこゝに外國の商船が出入したかは、大なる疑問である。

(二) アブアルフエダーの地理書は、諸種の材料を随分無責任に蒐録したもので、その記事には矛盾が尠くない。

現に問題のカンクウ即ちカンフウの所在に關しても、彼の記事には明白な矛盾がある。彼は支那の都市を紹介するに當つて、南と北に二個のカンクウを開列して居る。即ち第一番目の都市としては經度百六十度、緯度十四度のカンクウ（正しくはカンフウ）を挙げ、第五番目に問題の經度百六十四度四十分、緯度二十三度半のカンサー一名カンクウを挙げて居る。<sup>(9)</sup> さればかゝる曖昧な記事を根據として、アブデエイドのカンフウを杭州と斷ずることは出来ぬ、

(三) 第三の理由こそ、實にカンフウ杭州説に對つての堅城鐵壁ともいふべき根據で、カンフウ廣州説を主張する歐米の學者——千九百四年の『佛國東洋學院報告』B. E. F. E. O. に發表されたと

いふペリオの所説はまだ直接寓目の様を得ぬが——も、從來之に對して何等有効なる反駁を得加へなかつた様である。

吾が國の東洋學者は故那珂博士——博士は終始カンフウ激浦説を固執された。<sup>(10)</sup> ——を除き、大抵カンフウ廣州説に贊同を表して居る。併し歐米の學者同様、誰人も未だ曾て正面よりカンフウ陷落の年代に關するクラブロートの主張に駁撃を試みた者がない。

吾が輩の知れる限りに於て、東西の學者の中で、多少なりとも、このカンフウ陷落の年代問題に手を觸れたのは、坪井博士と石橋(五郎)君の二人かと思ふ。石橋君は勿論カンフウ廣州説を執らるゝのであるが、アブデエイド所傳の年代を間違と認めて、左の如き説明を下されて居る。

〔アブデエイドの所傳には〕Ranschou(黃巢)のカンフを陥れし時を、回曆二百六十四年

とせり。然るに此年は西曆八百七十七年より八百七十八年に跨り、唐の乾符四年八月より同五年七月に亘るものなり(二三正綜覽)。然るに唐書僖宗本紀、黄巢傳によれば、黄巢が廣州を陥れし時は、乾符六年五月にあり。是れ「アブ||ヂエイドの所傳に」合はず。乾符五年には、黄巢が杭州に寇せし時なれば、此點より見れば、カンフを杭州とする方適當なるべし。「されど吾人の所見によれば」この記事ある部分は、此書の著者「アブ||ヂエイド」が、Ibn Wahab といへる商人より聞きし話なれば、黄巢の亂の年代上、一年の差の如きは、ワハブが記憶の誤か、或は「アブ||ヂエイド」の傳聞の誤なるべし。(11)

坪井博士の所説も亦畧石橋君のそれと同一で、黄巢が廣州を圍んだのは、乾符六年三月以後であるから、ヘチラ紀元(回曆)で二百六十五年の第八

月以後でなければならぬ。さればアラビヤ人の見聞録などに二百六十四年とあるは、多分傳聞の誤ならんと申されて居る。(12)

此の如き解釋も一種の見方かと思ふが、翻つて一考すると、黄巢の賊の横行、之に伴ふカンフの陥落及び虐殺は、當時の外國貿易に痛切なる悪影響を與へた。賊衆が桑樹を濫伐した爲め、東南地方の養蠶の業衰微して、——『舊唐書』僖宗本紀に、廣明元年(西曆八八〇)正月元旦の制を載せて東南州府遭賊之處。農桑失業。耕種不時。就中廣州、荆南、湖南。盜賊留駐。人戶逃亡。傷夷最甚とある——當時の貿易の太宗であつた絹布の購買が出來ぬ。之に加ふるに國內の秩序紊れて、生命財産の安全も望み難くなつたから、カンフ在住の多數の外國商人は擧げて支那を引拂つた。爾後數十年間、外國の商船は全くカンフへ立ち寄らぬことゝなつたといふ。(13) 兎に角東西の互市にと

つて、空前の重大事件であるから、當時東洋に通商したムハメット教徒が、その年代を間違へるなどは信じ難い。アブマコウヂと同時代のマスーデ Macoudi の記録にも亦この事件を載せて、回曆二百六十四年のこと、明記してある。(14) マスーデはアブマコウヂと相識の間柄故、彼の記事は畢竟同一の材料を傳へたものとも考へらるゝが、その實マスーデ自身親しく支那に觀光した様であるから、(15) 若し假にこの回曆二百六十四年といふ年代が間違つて居たら、彼は之を訂正すべき幾多の便宜を持つた筈である。之に關せず、彼も亦、アブマコウヂと同様の年代を記載する以上、この年代に對して相當の信用を置かねばならぬ。單なる想像によつて、之を誤謬と斷ずるのは聊か早計の嫌ありと思ふ。

要するにカンフウ杭州説の第三の根據は、今日に至るまで未だ有効に反駁されて居らぬ。カンフ

ウ廣州説を主張する學者も、クラブロートのこの議論に對して、正面より反對することを躊躇する有様である。勿論クラブロートの議論の是非如何に拘らず、之と獨立してカンフウ廣州説が成立せぬではない。唐時代の支那の記録と、同時代のムハメット教徒の記録を對照比較する時は、殆ど必然的にカンフウ廣州説を承認せなければならぬと思ふ。されどクラブロートの議論をその儘に黙過することは、折角のカンフウ廣州説にとりて、九仞の功を一簣に缺く様の遺憾がないではない。

カンフウ廣州説がかゝる状態に在る原因は、畢竟支那記録の紀年——詳言すれば乾符五年の杭州陷落、乾符六年の廣州陷落——を絶対に信憑するからと思ふ。成程一部の支那記録、例へばかゝる場合に、尤も普通に引用される『新唐書』の僖宗本紀を見ると、

乾符五年八月黃巢陷杭州。

年次	史料	
	『舊唐書』	『新唐書』
乾符五年	三月黃巢之衆再攻江西。陷虔、吉、饒、信等州。自宣州渡江。由浙東(中畧)開山洞。(中畧)趨建州。遂陷閩中諸州。	八月黃巢陷杭州。九月黃巢陷越州。十二月黃巢陷福州。
乾符六年	四月黃巢陷桂管。五月賊圍廣州(中畧)黃巢陷廣州大掠嶺南郡邑。	五月黃巢陷廣州執司徒、揚州大都督嶺南東道節度使李福長史、淮南節度使副使知節度事。(中畧)既而黃巢賊令仙芝殘黨。復陷湖南浙西州郡。(中畧)據廣州求天平節鉞。
廣明元年	夏黃巢自廣州北踰五嶺。犯湖湘江浙。進逼廣陵。	夏黃巢之黨。自嶺表。北趨江淮。
		正月黃巢趨廣南。五月黃巢上表求天平節度使。
		三月賊踰江西(中畧)因刊山開道七百里。直趨建州(中畧)閩福州(中畧)陷桂管。進寇廣州。州。即日陷之。
		正月黃巢引兵渡黃巢攻破廣州。
		三月黃巢引兵渡黃巢攻破廣州。
		二月(黃巢)陷、虔、吉、饒、信等州。
		七月(黃)巢寇宣州不克。乃引兵入浙東。開山路七百里。攻剽福建諸州。十月陷福州。
		正月高駢遣將擊黃巢。大破之。黃巢趨廣南。
		九月(黃)巢上表求廣州節度使。(中畧)(黃巢)大怒攻廣州陷之殺節度使李迢。
		十一月(黃巢)自桂州編筏沿湘而下潭州。
		(春)淮南將張璠及(黃)巢戰於大雲倉。敗之。
		(中畧)途恣行攻劫(自廣州)上表。
		(春)淮南將張璠及(黃)巢戰於大雲倉。敗之。
		(中畧)途恣行攻劫(自廣州)上表。

(19)

(20)

乾符六年五月黃巢陷廣州。執嶺南東道節度使李迢。

ごあるが、この記事は果して絶対に信用すべきものであらう歟。『新唐書』の紀年は、ムハメツト教徒の所傳に比して、必ず一層信頼せなければならぬものであらう歟。吾が輩は自ら揣らず、從來學界より全く等閑にされた、若くは全く着手されなかつた此等の問題について、幾分新しい研究を試みたい。之が本論文起稿の主意である。杭州及び廣州の陥落の事實年代が明瞭となれば、クラブロートのカンフツ杭州説に對して、今一段進んだ批判を加へることが出來、又カンフツ廣州説に對して、一簧の功を添へることが出來るかと思ふ。

#### 四

元來唐末の史料は極めて不十分である。唐には宣宗以後實録が出來て居らぬ。<sup>(16)</sup> 宋の司馬光の『資治通鑑』に、宣宗の實録や僖宗の實録を引用してあるけれども、之は北宋の宋敏求の補綴したもので、勿論當時の實録ではない。實録以外の所謂朝

報邸抄等當時の記録も、多く唐末擾亂の際に散佚し盡きた。宋の歐陽脩、宋祁等も、

唐興中畧垂三百年。業距事叢。(中畧)其間巨盜再興。圖典爰逸。大中(八四七——八五九)以後。史錄不存。雖論著之人隨世衰撥。而疏舛殘餘。本末顛倒。故聖主、賢臣、叛人、佞子。善惡汨々。有所未盡。可爲永愾者矣。

と公言して居る。<sup>(17)</sup> 實際支那歷代中に、唐末程史實の不明で、年月の不正確な時代は尠ない。それは『通鑑考異』を一閱しても、容易に了解し得らるゝ筈と思ふ。清の錢大昕は、

蓋宣宗以後。實錄散亡。傳聞互異。新舊兩史之抵牾者。難以更僕數一矣。

と評して居るが、<sup>(18)</sup> 實際はそれ以上である。唐末の史實を研究するに當つては、先づ第一にこの注意を忘れてはならぬ。現に問題の杭州及び廣州の陥落の事實年月についても、左の如く所傳區々を極めて居る。



上掲の異同表の中で、左の二點が特に注意を要する。

(一)黃巢の賊が杭州を攻陥したことは、『新唐書』の僖宗本紀に記載するのみで、他の記録には見當らぬ。

二)廣州陷落の年月は區々で一致して居らぬ。乾符五年説もあれば、乾符六年説もある。見様によれば廣明元年説もないではない。同じく乾符六年説の中にも、或は五月とし、或は九月とし、或は冬月として居る。

以下項を分ち、この二點に就いて愚見を開列せようと思ふ。

### 五

江南の一大都會たる杭州の陷落は、可なりの大事件なるに拘らず、『新唐書』の僖宗本紀を除き、他の記録に見當らぬとは一の不思議と申さねばならぬ。加之『舊唐書』僖宗本紀の乾符六年十月の條

初〔高〕駢在浙西。遣大將張璠梁續(續?)等。

大破黃巢於浙東。賊進寇福建。踰嶺表。

とある。この記事は明に問題の『新唐書』の乾符五年八月乃至十二月の條の、黃巢が杭州より越州、福州方面を蹂躪した時の事實を述べたものであるが、『舊唐書』に據ると、この時黃巢の蹂躪したのは浙東で、浙西の杭州を攻陥せしものとは認め難い。『舊唐書』の僖宗本紀の乾符五年三月の記事、及び『新唐書』の黃巢傳、高駢傳等の記事も亦同様に、黃巢の杭州を攻陥せしことを否定する様に見受けられる。殊に杭州陷落説を否定すべき有力なる反證は、宋の葛澧の錢塘賦である。葛澧はこの賦——南宋の王象之の『輿地紀勝』卷二にこの賦の一節を引いて、帝都賦と題してあるが、南宋時代に錢塘即ち杭州が帝居となつた故と想はれる——中に、唐末江浙地方の諸城市多く兵燹の厄に罹り

しに、獨り錢塘(杭州)のみ安穩無事であつたことを述べて。

自唐乾符之後。擁戎車者接軌。徐縮、劉浩之徒。孫儒、董昌之輩。或毒螫於淮甸之邦。或剽掠於二澗之內。蘇常近境。允常故都。鞠爲戰場。蕩爲兵墟。至錢塘一則不然。賴守土以安居。雖黃巢之衆。不能下臨安。而深入上

雖田頰之暴。弗克破北門。而馳驅歷五季之後。迄聖朝之初。幾百年間。安堵無虞。

と言明して居るのを見れば、(2)黄巢が杭州を攻陥せざりしことに就いては何等の疑惑を容れぬ。是由つて推すと、『新唐書』の僖宗本紀乾符五年の記事は、殆ど信憑するに足らぬ。少くともこの記事を其儘に信用するのは危険である。乾符五年杭州陥落の事實が怪しくなると同時に、從來カンフウ杭州説の聖城鐵壁視されて居つた、第三の根據が極めて薄弱となるを免れぬ。何となれば回曆二

百六十四年にカンフウが賊衆の爲に陥落されたといふ記事は、最早カンフウ杭州説に對して何等の保障を與へぬのみでなく、若し杭州陥落の事實存在せざる場合には、カンフウ杭州説は、却つてこの記事の爲に、絶対に成立し得ざることとなるからである。

## 六

當時の所傳すら一致を缺いて居る廣州陥落の年月を、千年の後に的確に決定することは、殆ど不可能に近い。併し諸般の事情から推測すると、乾符六年説より乾符五年説の方が、より合理の様に想はれる。『舊唐書』の僖宗本紀に據ると、黄巢は一面では廣州を攻圍しつつ、一面では朝廷に妥協を申込んだ。この時黄巢の處置に就いて朝議が纏らぬ。同平章事の盧攜は黄巢の排斥を主張し、その同僚の鄭畋は黄巢の懷柔を主張した。鄭盧兩相の意見の相違が嵩じて、遂に見苦しい爭論を起し

之が爲に二人とも僖宗の譴責を受け、その職を免せられた。

思ふ。司馬光や吳縝も矢張り乾符五年説を採つて居る。<sup>(22)</sup>

この兩相の罷免は乾符五年のことと認められるから、従つて黃巢の廣州攻圍も亦、乾符五年のことと認めねばならぬ。尤も鄭、盧兩相罷免の年代にも、唐末の出來事の例として、異説がないではない。『新唐書』の僖宗本紀、宰相表、五行志(卷卅五)、崔沆傳、(卷百六十)『舊唐書』の盧攜傳、(卷百七十八)『僖宗實錄』『資治通鑑』等は皆乾符五年であるが、『舊唐書』の僖宗本紀、豆盧瑑傳(卷百七十七)、鄭畋傳(卷百七十八)、『新唐書』の五行志(卷卅六)、『冊府元龜』卷三百卅三等には乾符六年となつて居る。されど宰相の任免に就いては概して『新唐書』の宰相表が尤も信賴すべく、而してその宰相表に、

乾符五年五月丁酉〔鄭〕畋〔盧〕攜並罷。  
 と明記してある以上、乾符五年説に従ふが穩當と

鄭盧兩相罷免の原因が、黃巢の處置に關する爭論に在ることは、新舊『唐書』の紀傳に見えて、所傳畧一致して居るが、獨り『新唐書』の南蠻傳にはこの二人の爭論罷相の事實を、南詔との交渉問題の結果と記してある。『資治通鑑』にも『僖宗實錄』等を根據として、この二人の罷免を南蠻に對する處置に關するものと認めて居る。<sup>(23)</sup>

元來鄭畋と盧攜の二人は、親族の間柄なるに拘らず、甚だ不和で、政治上の意見も常に一致を缺いた。南詔事件でも、黃巢事件でも、その他の事件でも、事毎に衝突して居る。従つて唐末紛擾の際とて、二人の免職の原因を、或は南詔事件とし或は黃巢事件として、傳聞を異にしたものと思はれる。されど『新唐書』の南蠻傳に據ると、鄭盧兩相が南詔事件に就いて爭論したのは、高駢が荆南

の節度使在職中のことで、而して高駉は乾符四年に、已に鎮海の節度使に遷つて居るから、<sup>(24)</sup> 南詔問題に關する爭論は、乾符四年の初期か、若くば乾符四年以前の事件でなければならぬ。従つて之を乾符五年五月の兩相罷免の原因とは認め難い様に思ふ。

上來疊次言明せし如く、唐末の事件は紛糾を極めた絲筋同様、一方を整理すると一方に引掛りを生ずる状態故、徹底的に之を判決することは容易でないが、大體から論じて鄭盧兩相の罷免は乾符五年の黃巢が廣州攻圍中の出來事で、黃巢の處置に對する爭論の結果と認めるのが妥當と想はれる『資治通鑑』に引用せる『僖宗實錄』に據ると、鄭盧兩相の爭論したのは乾符五年五月の朔、丙申の日で、免職されたのは、その翌丁酉の日である。<sup>(25)</sup>

この時朝議は大體に於て、盧攜の説に従ひ、黃巢排斥に傾き居り、その決議の次第を廣州の黃巢の

許に報告せしむることゝなつた。

當時の國都の長安と廣州の距離は約五千五百里で、<sup>(26)</sup> 普通に二ヶ月行程となつて居るが、<sup>(27)</sup> 迅速を要する場合には、一ヶ月以内に短縮することが出来る。『續資通鑑』に據ると、この前後に朝廷より嶺南へ派遣された仇公度といふ使者は、十月一日に廣州を出發し、その二十九日に長安に歸着して居る。<sup>(28)</sup> 是に由つて推測すると、五月丁酉（二日）に派遣された朝廷の使者は、途中二十八九日を費して、五月の末日か、六月初に廣州に到達せなければならぬ。黃巢はその報告を接手すると朝廷の彼に對する待遇に憤慨し、大軍を發して、即日（廣州を攻め落したといへば）廣州陷落の時日も亦、當然乾符五年五月末か、六月初であらねばならぬ。

ムハメット教徒所傳の回曆二百六十四年を支那曆に換算すると、乾符四年八月二日乃至乾符五年

八月一日に當る。故に廣州の陷落を乾符五年の五月六月の交と認めると、ムハメット教徒の所傳とよく吻合して何等の故障がない。五六月の交といへば、丁度蕃商の廣州へ來航滞在の時期に當るから自然陷落の際に、鋒刃の厄に罹つた者が多數となつたのであらう。さればカンフウ(廣府)陷落の年代の回曆二百六十四年を、傳聞の誤と斷ずることなくして、東西の史料をよく一致せしめ得べき筈と思ふ。

七

以上述べ來つた吾が輩の所論を要約すると、左の五點に歸着する。

- (一) 唐末の紀年は極めて紛糾して居る。
- (二) 『新唐書』の僖宗本紀等に、杭州の陷落を乾符五年、廣州の陷落を乾符六年と記載してあつても、之に絶對的信用を置くことが出来ぬ。
- (三) 黃巢の賊が杭州を攻陥したといふ事實は極めて

不確實で、較ろ信憑し難い。

- (四) 支那の記録に見わたる廣州陷落の年代一定せぬから、之を根據としてムハメット教徒所傳の回曆二百六十四年の當否を論ずるよりも、較ろムハメット教徒の所傳を根據として、支那記録の年代の當否を決定すべきものと思ふ。

(五) 東西の史料を比較して考察すると、廣州の陷落は較ろ乾符五年と認むべきものであらう。

之と共に(1)カンフウ杭州説の否定(2)カンフウ陷落年代の確立、(3)カンフウ廣州説の助成等の諸問題について、從來の研究に幾分の進捗を與へた積りである。

- (1) Reinaud; Relation des Voyages de. Tome I. P. 63-64
- (2) Renaudot; Anciennes Relations de l'Inde et de la Chine de. 1718. P. 180.
- (3) Klapproth; Renseignemens sur les Ports de Gampou et de Zaithoun. (J. A., 1824, B. P. 39-40)
- (4) Cordier; Yule's Cathay and the way thither. vol. I. P. 89

- (5) Klaproth; Memoires relatifs a l'Asie. Tome II, P. 201—206.  
 et Pavet de Courteille) Tome II, P. 302.
- (6) Cordier; Yule's Marco Polo. vol. II, P.199.  
 Cordier; Yule's Cathay. vol. I, P. 89.
- (7) Klaproth; Tableaux historiques de l'Asie. P.229.
- (8) 藤田(豊八)君の「宋代の市舶司及び市舶條例」(大正六年五月の「東洋學報」一八三頁、一九〇—一九三頁)  
 拙稿「宋末の提舉市舶使西域人蒲壽庚に就いて」(大正四年十月の「史學雜誌」)一一頁
- (9) Re naud et Guyard; Geographie d'Aboulféda. Tome II, 2  
 P. 122, 124.
- (10) 「支那通史」卷之三下、八八一—八九頁  
 「那珂通世遺書」の「成吉思汗實錄續編」一四二頁
- (11) 石橋君の「唐宋時代の支那沿海貿易車貿易港に就いて」(明治卅四年九月の「史學雜誌」)一九—二〇頁
- (12) 「史學研究法」(明治卅六年十月)二一三頁
- (13) Re naud; Relation des Voyages. Tome I P.63 et P.68.  
 拙著「波斯灣の東洋貿易港に就いて」(大正五年七月の「史林」)一九—二〇頁
- (14) Macondi; Prairies d'Or. (Traduit Par Barbier de Meynard  
 et Pavet de Courteille) Tome II, P. 302.
- (15) Macondi; Prairies d' Or. Tome I, P. 234.
- (16) 宋の高似孫の「史略」卷二  
 清の精翼の「廿二史劄記」卷十六
- (17) 「新唐書」卷百卅二の章述傳贊
- (18) 「廿二史攷異」卷四十六
- (19) 「學海類編」及び「奇賞齋叢書」に收むる所の宋の無名氏撰述の「平菓事跡考」
- (20) 「資治通鑑」唐紀六十九乾符六年五月の條の注に引ける「續資治通鑑」唐紀六十九乾符五年五月の條
- (21) 「歷代賦彙」卷卅七所収
- (22) 「資治通鑑」唐紀六十九乾符五年五月の條。  
 宋の吳縝の「新唐書料謬」卷六の乾符五年五月風雹事紀志有二不同一の條。
- (23) 「資治通鑑」唐紀六十九の乾符五年五月の條
- (24) 「舊唐書」卷百八十二の高駢傳
- (25) 「舊唐書」僖宗本紀乾符四年六月の條
- (26) 「資治通鑑」唐紀六十九乾符五年五月の條、及びその注
- (27) 「舊唐書」卷四十一、地理志
- (28) Re naud; Relation des Voyages. Tome I, P. 79.
- (29) 「資治通鑑」唐紀六十九乾符六年五月の條の注